

ふさがりて幻まぼろしのちまたに離別りべつの涙なみだをそぐ。

行ゆき春はるや鳥とり啼なまき魚うまの目めは目め

これを矢立やたての初はじめてとして行道ぎやうだう猶なほす、まず。

一般

段級

【奥の細道】
 いっぱいになり、幻のようにはかないこの世の分かれ道に離別の涙を流す。
 もう春は過ぎようとしている。その別れを思い鳥は鳴き、魚の目には涙が浮かんでいるかのように見える。
 これを（旅で使う）矢立ての書き始めとして（出発したが）行く道はやはり（足が）進まない。

